村井静馬著

明治太平記

五編

下

へ遠14
2504
26-10

へ遠 14
2504
26-104

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

官許

明治太平記 全

東京書林 延壽堂發兌

明治太平記五編巻之二

東京 村井静馬編輯

此夜大鳥圭介木古内の陣營より衆に説て全軍を五稜郭の近邊より退くせんと議まれども衆兵故なく茲を棄て退く支を肯ぐ小ども大鳥思慮のる人より辞尽し利害を演て只管陣中を走回り諸隊長を説諭せしうべ天明に至りて決議なし因て兵士三百餘を泉驛且つ矢不来に留め自餘の兵士ハ悉く五稜郭ゑ退くに

至り是より休戦三日なりしが偖また此月廿三日官軍
更に死士を撰びもさ二股を襲撃おそれみぞ賊兵固く胸壁
に據りて進みも出ぬ退きもせず必死を究めて防戦を
因て官兵も隊を整へ相對して砲撃する事須臾も
止む時なりざれば砲声百雷の落るが如く為に山嶽
も震動せり此とき五稜郭の賊将たる瀧川充太郎と喚
る者兵を率ひて馳来り二股の賊を援けんとせしに
既ふしぎ日の晩しかも此日は雌雄決せずして相互ひに

兵を引き次の日も又拂曉より両軍砲戦に及びて
終日挑み争ふ程に賊軍千餘の人數もて一挺の鉄
砲放りて各千發放ちしかば銃熱して握るに能はず
因て冷水を桶に貯へ且つ浸しては且つ打てる
斯の如くの烈戦なれど此日も勝敗決せざれば翌二十
五日もい賊将滝川甚だ激しく先此日は力戦して
官軍の目を駭かんと精兵數百を率へて壁を踰へ
て突き出たる勢ひ最も猛しかれば官軍大いに

辟易して百歩ばかりも退きたるその時監軍駒井正五郎を近傍の山に在りて軍の模様を見て居たりしが爰に至りて憤懣に堪ぶ僅に従ふ所の士両三輩と侶俱に直ちに山より馳下り賊軍の中隊へ會釈もなく砍て入り四角八面に薙立れば始め引色見へたりし官軍も又隊伍を整へ取て返して撃戦ふ賊兵大いに乱れ立て討る者も尠からず逃退くも多くしば彼の滝川をいとく激しく頻りに躬方を勵まして駒井と目掛て討て蒐るを正五郎は些とも屈せず宛然夜叉の暴たる如く近寄る敵を斫まくり或は蹴仆し踏みて勢ひ當り難しと雖も滝川も又亦る者ゆへ渠と迫を討取れと自らも先に找むみそ躬方の死士等憤発して駒井一個に競ひかゝるべ其身金石にあらざれば數ケ所の手痍を蒙りて遂に斬死為たりしい又惜むべき勇士とぞ介べ此日の戦ひに双方死傷の者多くれど

駒井奮勇敵中ヨ斫入ル遂ニ戰死セ

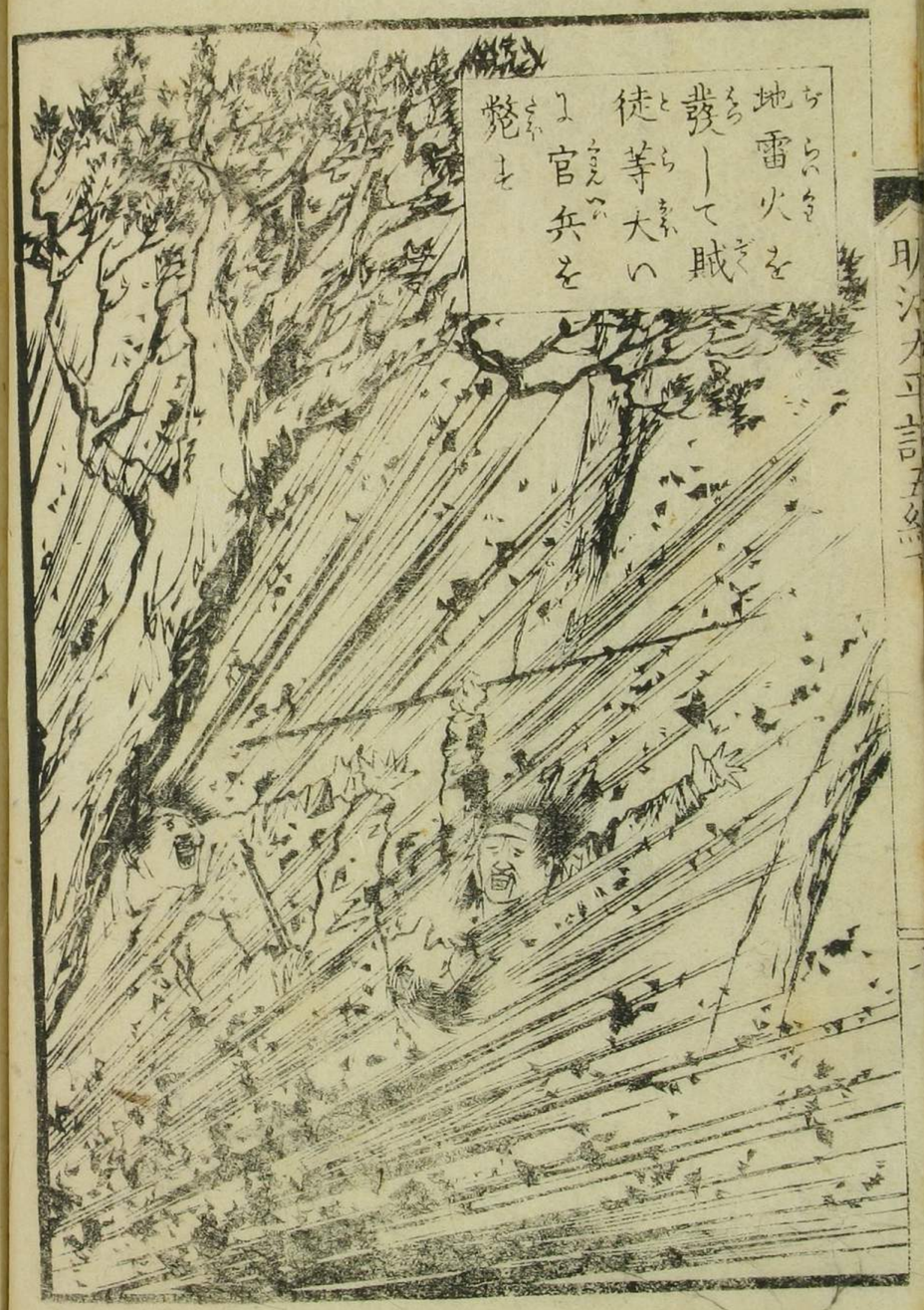
尚勝敗を判さざる故是より暫くして賊軍も堅く砦を守るのみ更に兵を出さねば官軍もまた壁を至急に破りがたきを知りて姑く兵を引しぞ是より先廿四日官艦甲鐵春日長陽陽春丁卯の五隻を以て函館港を襲ひしに賊艦も亦田天蟠竜千代田形の三隻を邀へ或は五町或は十町を隔てて砲戰に及びしが稍午前に至るころ官艦姑く退きしが又進んで砲擊せ賊艦の方にて

我が辨天の砲臺を援けと做さんと思ふあぞ其彈丸の敵船に届くべきの間數を測り故意と佯り負たる振りして海岸の方へ退くに官艦方畧と知らぬして頻りに競ふて追ふ既にして彈丸の達する所に至るみぞ果して件の砲臺より大砲をうち掛るとて雨を注ぐが如くなれども官艦敢て屈する体なく船を左右に運轉して飛来る砲玉を防ぎあぐるに尚之に逼らんとすれども水理に熟せざるが故に倘

暗礁に觸れんと懼る所なく猥りに深入りする支藏左右するうち賊彈の為に長陽艦の甲板梁を打碎くに及びしかば遂に五艘諸共に艦を還して退けり偖て廿六日に至り官艦五隻又進んで賊の三艦と砲戰せしが春日陽春の両艦ハ賊彈の為に船を撃れ而して賊艦田天丸へも大砲一発打込れて甲澤源藏等あまた死せり此日の戰爭も勝敗さらに決せずして互ひに兵を引けり

偖また廿九日に官軍海陸並び進んで矢不来を襲ふ此時大鳥圭介五稜郭より這所に来りて屯をして居たる支隊稍抗戰に及ぶ程に官軍此地に進むの始め別に逞兵三十餘人を潛ふ路傍の山谷より廻して賊徒を横擊させんと謀り既に嶮岨に攀登らせしに賊兵豫て山腹に胸壁を築きて戍りの兵を置たるを官兵登り来ると見るより俯して之れを狙擊するに殆ど空丸なりしを忽ち二十餘名を斃せり

時に本道の官軍ハ矢不来の堡に逼りて戦ひ盛んなりけれバ両軍の砲烟天を蔽ふて白日太陽を見ることあたハず朦朧とせし其折から豫て賊徒の填め置きたる地雷火忽ち逆発するゆゑ裂声山谷も震ふが如く為に官兵の死する者数十人に及びたり因て賊軍勢ひ震ひ壁を出て官軍を撃て大いに悩ます折から甲鉄以下五隻の軍艦海岸より逼り来りて賊の中隊を乱射せしかバ賊甚ゞ勢ひ挫けて直ちに胸壁に逃入る所へまた彼の甲鉄艦よりつゞく百斤弾を放つと最も頻りなりければ其弾丸それて胸壁を貫き大砲を打砕きたるのミか天野新太郎等両三名忽ちまとに中りしが支体微塵になりしとぞ斯の如きの砲声なれバ賊兵當りがたきを知りて各此地の堡を捨て有川と言へる地に退き再び敗兵を纏集めて還り戦はんと志す折から春日艦に在る所の官兵端舟二三艘に打ち乗りて忽ちに上陸して賊徒を追ふ支急なるにぞ


地雷火を
發して賊
徒等大い
に官兵を
驚ま

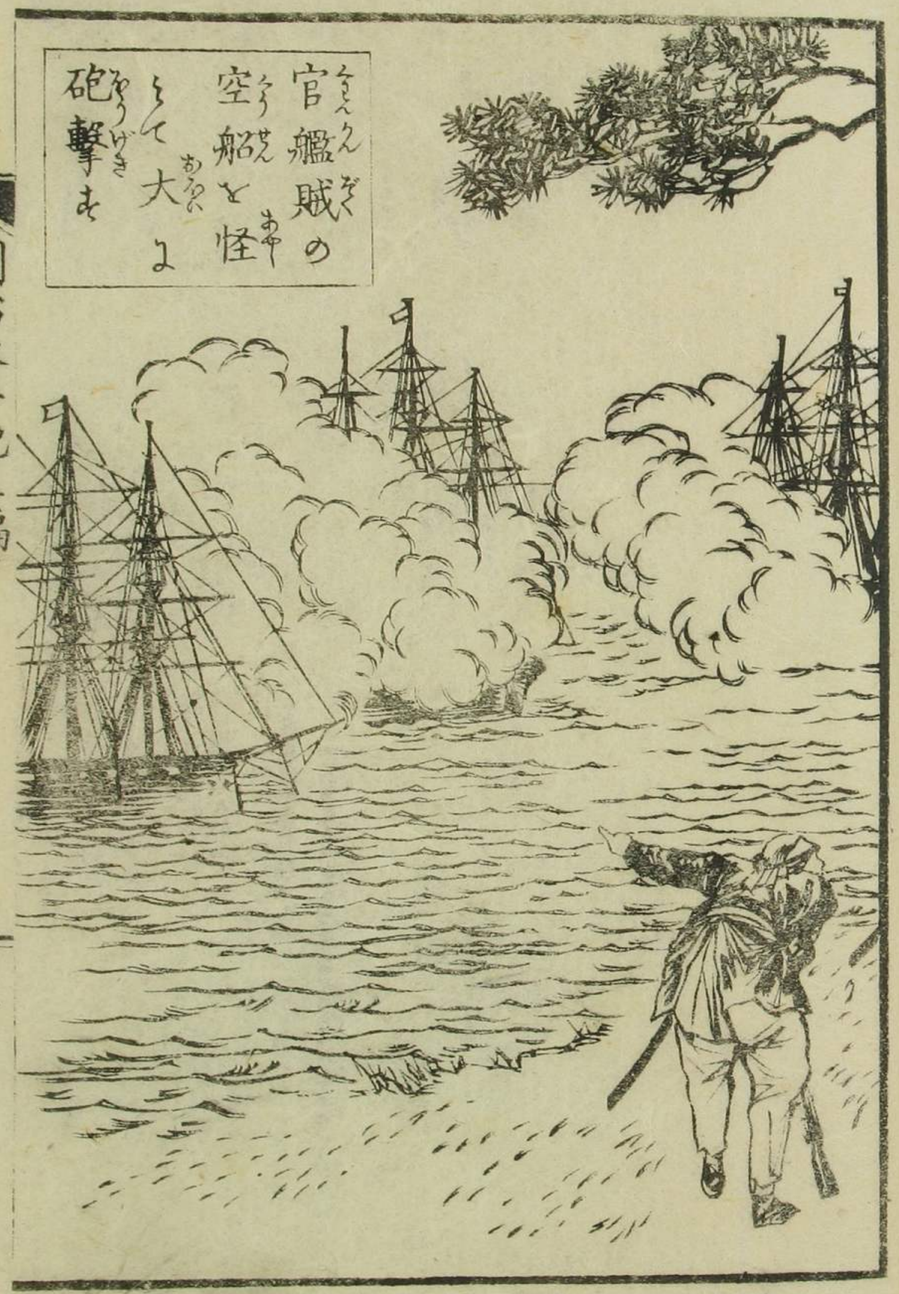
賊軍の其中より永井蠖伸齋等二三名勇を奮ひて
血戰して討死に及び一人自餘の賊徒々敵に紙
得ず遂に乱れて敗走せり余人五稜郭に脱兵
等八矢不来の胸壁を破られたりと聞くよりも驚く
事大方ならず總督榎本釜次郎自ら駿馬に
鞭を挙げ彼の有川まで至らんとして途に敗兵の
走るに會へり因て榎本是等を指揮して再び備
を立直して取て返して戰ふんと務めて紙制

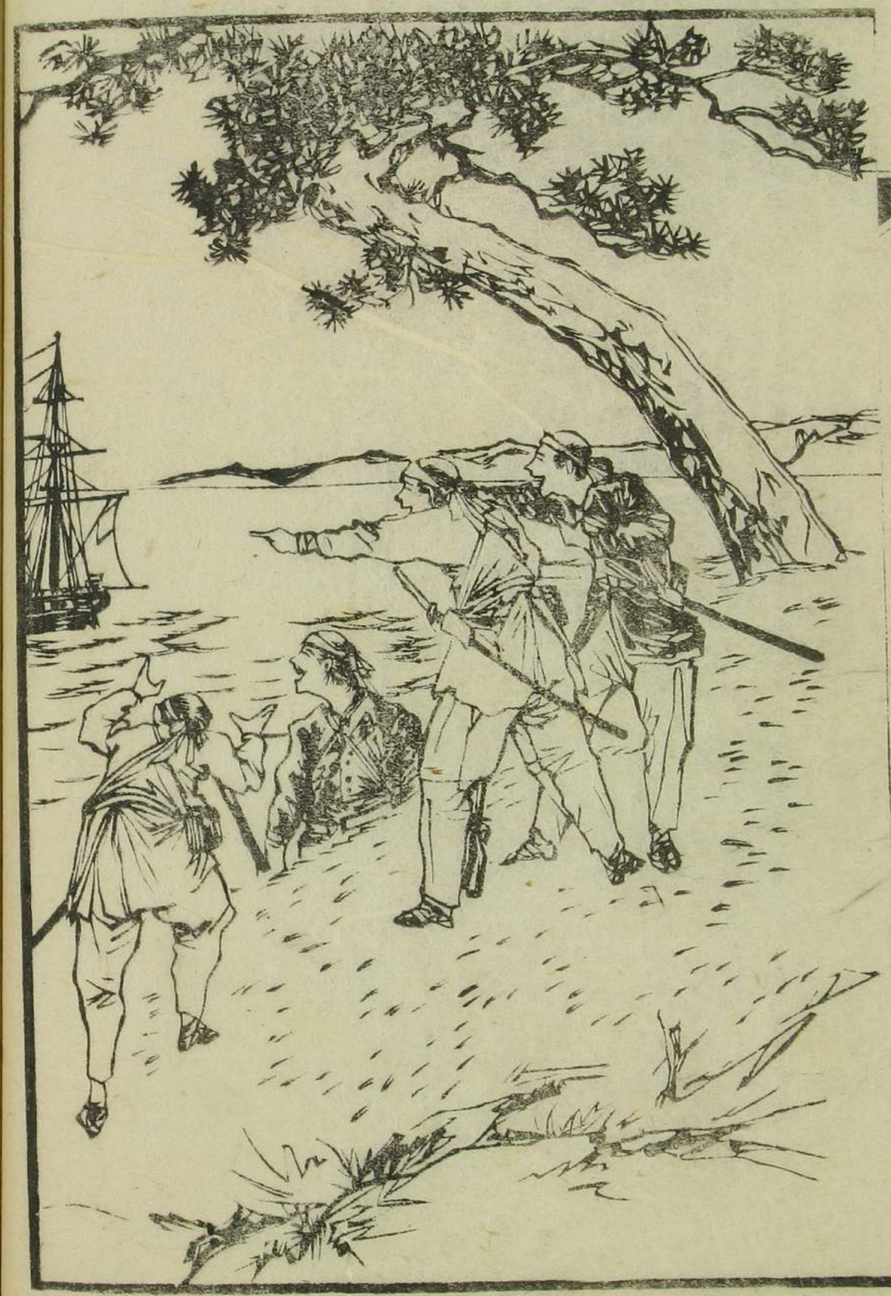
もれども崩れ立たる癖なれを敗兵散て留ま
らず終に全軍を七重濱に引き再挙を図らん
とせしうちも日既に昏に及び一人兵士等も
労るをもて遂に此夜を果も紙得ず姑く息を休め
居たるに此夜二股四の官軍七重濱の下に出て
賊兵の帰路を絶ち本道よりも兵を進めて挾撃
に做ふに其沙汰聞へたりしかば斯て賊方危
ふしとて即時に兵を五稜郭及び函館に引上げ

たり因て官軍兵を進めて輙く有川をも乗取りぬ
此日両軍の海兵も姑く兵を交へて砲戰に及び
ゲ是まさ勝敗を決せんとす偵て五月三日の夜大島
圭介を將として有川を襲はんと僅うして賊兵百餘人
五稜郭を發して暗に乘じて官軍の陣営に擊
入るみぞ官兵大に狼狽して先を爭ひ逃走る彼
大鳥下知して追ひ官軍の捨たる所の大砲
及び弾藥を奪ひ十餘人の虜を率て徐々として

退陣す此次の日も官艦来りて賊の三艦と戰ひた
れど尚勝敗を決せざりしが其夜千代田形艦い奈
何なりけん暗に迷ひて過まつて暗礁に觸れ動
く支能はざるにぞ船將森本弘策なる者甚だ周
章たりけん蒸気の機関を打碎き大砲の火
門を鎖して捨て上陸せしと言へみぞ衆駭いて諫
むれど听ずして自己ゲ思ふ侭に走舸に乘て
陸に上るべ自餘の兵士も詮術なく悉く上陸して

仔細を總督に訴ふれば榎本は其盛忽ち怒り支を誤まる筋憤り弘策を召て詰り問ふに一句も答ふる支を得ず果て狂人の真似をして其座を佯り遁まんとせしを榎本則ち渠を罰して舷に水卒に墮せしめぞ此時市川慎太郎も又其船の士官たりしが大いに怒り恥として屠腹をして衆に謝せり然る件の千代田形も夜更て潮の来りし次自然と浮上りて港の内より流れ出しが次の日の未明に至り甲鉄長陽の両軍艦が函館の港外に泊し居たる方に向ひ漂々として流れ行くを件の二艦は見るよりも偖は賊艦暁に乗じ襲ひ来るものあらんと之を邀へ砲發なせども千代田形は更に応ぜずいよいよ進んで甲鉄艦の邊り近く至るぞ甲鉄は宮古港にて變に會ふたるを慮り忽ちに去るを避け長陽艦より横さまに益烈しく砲撃すれど千代田形はあれども応ぜず尚漸次に進み来りて終に二艦の間を通り過んとする


官艦賊の
空船を怪
して大
砲撃ち



程より餘りの支より官兵等ハ或ハ懼れ且怪まして遂より近付て之を見れバ艦中更より人影もなく蒸気の機関破れしる則ち空船なりしゝバ官兵姑く呆きしゝが乗も遣らきを分捕せし紙賊兵遥ふなるを見て是所謂死せる孔明生ける仲達を走らせしなりと皆手を打て笑ひしゝぞ此夜古屋作左エ門等賊兵二百餘りを率ひ風雨より乗じて大川村なる官軍の営を襲ひ不意より起りて斫入るゝぞ折しゝ官兵怠慢しゝて枕を高く安眠せしゝバ敵打入りぬと聞くしゝも陣中大いより騒ぎたち俄しゝふ起て戦ふんとするより咫尺も判らぬ暗なれハ何ぞ紙敵と定めかねて同士討するも尠らぬぞ此虚間より賊徒等ハ兵を四方より散らしゝて躰て陣営より火を放ち其侭ふして走去るゝ同時より賊の別軍百名七重濱の敵陣を冒しゝあれも営中より火を放てバ官軍當りがたを度り忽ち風下より走り出烟の中より賊兵を狙ひ打ふ為たりしゝバ死傷の者も多ゝしゝど賊徒等尚も

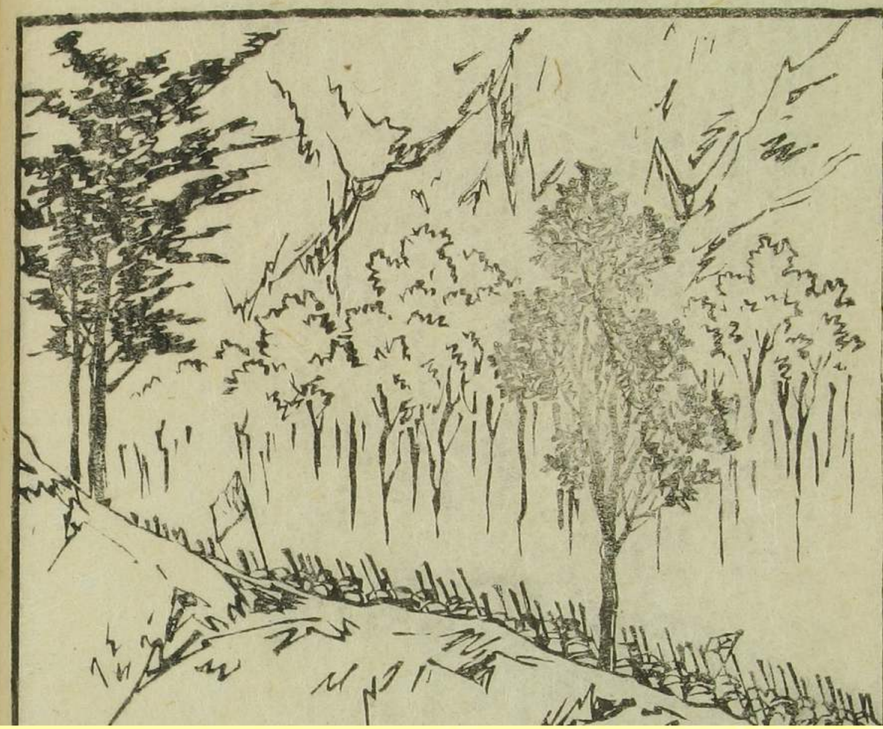
屈せ
と言
然る
加へ
を艦
らず
官艦
を以
当らむ
九を
し
又七日の官艦五隻函館港を襲来せり
賊艦蟠竜丸い去る四日の戦争を官軍の砲
錐を撃を運転自由ならざる故即今修理を
れどもいまだ成功を至らわば之を砲臺の傍
て浮砲臺とし巨砲十三門を片舷
を打掛ると既に数艘を及ぶべし是が為を

賊兵斃る者数十人加之を蒸気機関の要
器を砕くべし回天丸い是よりして竟を運転まる
事ひ因ることを浮砲臺とし巨砲十三門を片舷
を備て連艘を及び忽ち春日艦の官兵数十
名を今作す斯の如くの勢ひ官艦終を進む
兵を引き退くみぞれ夜蟠竜の蒸気機関を至急
を修ると次の日復本大鳥の両将兵八百を帥
ひて理軍の本営とし重村を襲えんとし然る

是等の趣き紙内應ゐせる者ありて
邊ゐる草沢の中ゑ兵を伏せ置き敵押寄
りも伏兵等一〻起り立ち小銃數百
賊兵大いゑ駭き慌て片山某以下の面々
堪へうねて敗走るも官兵透さず追
傷けゝ薄暮ゑ及びて凱陣せり走
兵の中稍官軍ゑ帰まる者ありて余
夫等ゞ間諜せゝ故ありんう徒て十

海陸謀計を合せ大挙して攻蒐らん
艦ゑ函館の後ろなる大森濱といふ
丸及び小舟を以て陸兵を寒川村ゑ
〻山中ゑ潜伏せ是まで賊軍のゆ
者のなきばあり偖甲鉄長陽
館の前面ゑ逼きば賊將松岡磐士
理なるを以て則ち此艦を乗出し浮砲
辨天以下の諸砲臺と倶ゑ力を合せ

草澤中ヨリ
埋伏シテ
官軍賊兵
を狙撃ス

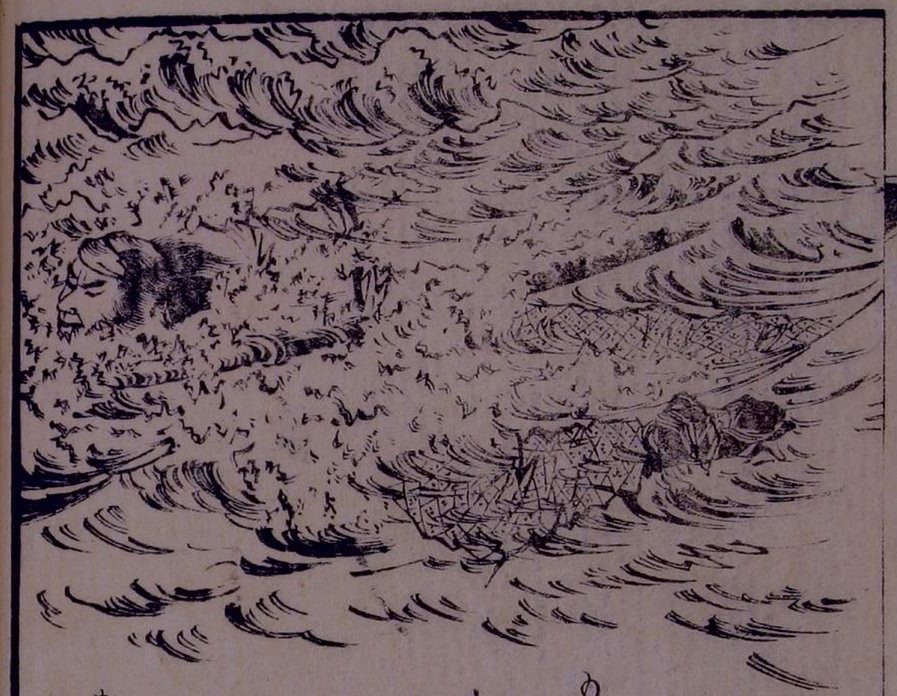


へべ大鳥圭介本多幸七郎等い數百の兵を引率し
て七重濱の方へ進む所々の臺場へ兵を分けて本道
の官軍を迎へて防ぎ戦ふ折しも彼の山中より潛伏
るしたる官兵俄に起り立ち樹林を楯ふるいつも
賊の背ろを砲擊よ及へば賊將滝川充太郎等夫と
見るより奮激して頗る力戦よ及ぶと雖も思ひ設け
ぬ山中より敵兵不意よ出たるをもて前後を支ゆる
を悠なく且戦ひ且走りて皆千代岡めぞ退きて

偖て海面の戦ひは両軍互ひよ勵み合ふめぞ數刻よ
至れど勝敗決せず此時既よ春日艦も函館の前
面よ進みて甲鉄以下の軍艦を援け押捕圍んで蟠
竜艦を奪ひ取らんと圖りしふ賊將松岡磐吉ら
殊よ水師を善くする者ふて蟠竜艦を運轉まる支手
足を使ふ如くあるふ砲手水倉伊佐吉とふ者又その
業よ長たるをもて躰さ「ナホレヲン」砲を敵船目がけて
發しなるよ其榴弾忽ちよ朝陽艦の硝庫よ中り黒烟

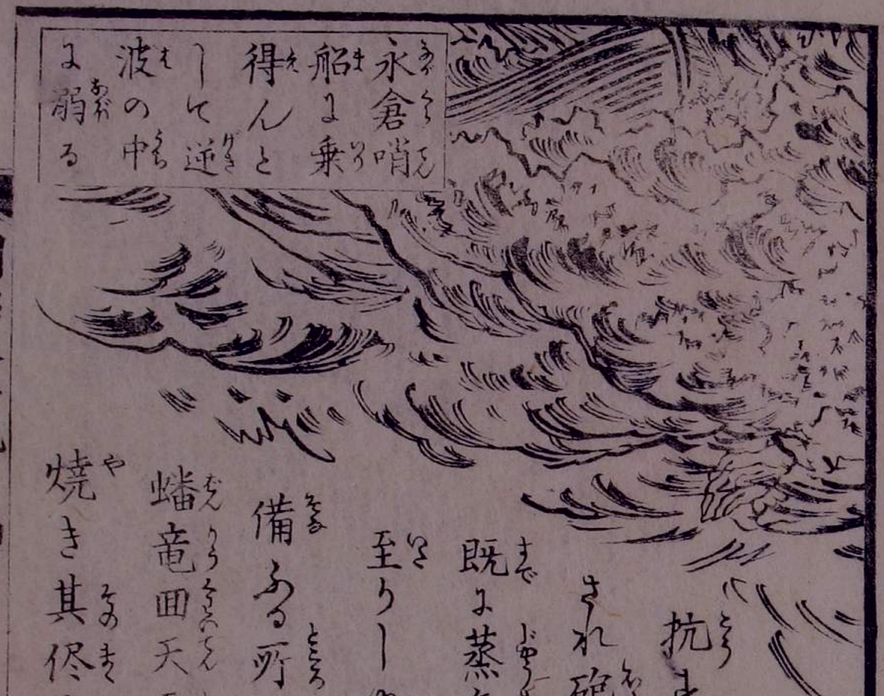
天より立登り響き十里より徹せーゞ既より全船破壊ーて僅なる船をたゞせーゆ人二分時間を過ぎーて遂より沈没為たりとぞ因て春日艦以下の諸艦先づ賊艦を打捨て朝陽艦より馳至り溺るゝ人を濟ひるゞ此艦より乘組む者凡千人許りなりしも茲より命を助る者廿餘人より過ぎざりる是時海陸の賊兵等ハかのく手を拍ち声を揚く連りり快と呼ぶ程ふ就中蟠竜丸ハ鋭気始めふ十倍していよく艦を進めつゝ砲を官艦より乱射する

ふぞ田天丸も浮臺場とあり俱より烈しく砲撃せーゞ此時官軍の陸兵ハ既より賊軍を撃走らせく咸千代岡より追込りり稍函館の海岸迄乘入る支を得たりーるバ更より大砲の火門を轉ゞ陸地よりして田天丸の後面を乱射ゑせゞ陽春艦もあるを援けて前面よりしく砲撃する支頗る烈しりーるバ田天の船將荒井郁之助等前後より敵の弾丸を受くバ又施まゞき術なさふ一同哨船より打乘りて一本木より着岸ーー脱出て五稜郭より退り



然れども蟠竜艦を尚も鋭氣を屈せざるして一艦を
りて數艦に當り砲撃まる
支數刻に及べば終に弾
藥も竭んとして砲勢
漸次に衰ふる彼甲鉄艦
より窺ひまるして直ちに
逼りて砲撃せらるる今ハ

永倉哨船に乗
得んと
して逆
波の中
に弱る



なほ蟠龍艦もおきに
抗まる支能ざる散々に打做
されて砲臺の下まで逃退きたるが
既に蒸氣の機関をも打破らるに
至りて再び用を為さざるを度り
備ふる所の大砲を悉く海に投入れ
蟠竜丙天両艦とりふ火を縦つて之を
焼き其尽に上陸して陸上に在る官

兵ま面も掉らぎ突て掛りゝ死物狂ひの働きふ官軍支
ゆる支離ぐ色めき立て崩るを賊兵程よく追捨て皆
辨天の砲臺ま入まり此時砲手永倉伊佐吉港内ふ漂
ふ所の小舟ま取乗りて辨天砲臺ま至らんと水中を泳
ぎて既ふ舟ま達せんとゝく逆波の為ま終ま及ばず斗処
ま溺死をせゝと言ふ是ま至りて賊軍ハ戦艦を悉く失
ひる故大いま力を失へべ又官軍の陸兵等ハ賊の海軍ハ
らぎりて他を顧るの患ひもなく再び来り襲ふぞ

賊将土方歳三等必死とありて討て出頻りふ勇を奮ひ
しらど目ふ餘りたる大軍の勝ま乗じて攻蒐る勢ひ最
も烈しゝれバ須臾ゞ程ハ支へゝゞ土方以下数十名茲ま
討死せゝふ依り残兵ハ敗走して五稜郭千代ゞ岡
辨天砲臺の三ケ所へおのゝ兵を引く程ま官軍大いま
勝利を得て所々の賊兵を追退け終ま函館を恢復
せり此日ハ官軍賊軍とも互ひま一挙ま支を成んと
決戦ま及びしるまべ合撃頗る烈しゝて朝卯の刻ま

戰ひ起り酣の剣ふ終ると言ふ

是より賊兵五稜郭以下三ヶ所に楯籠り尚官軍に抗する支より賊威漸次に衰ふるに至りて官兵ハ信を厚うし又榎本等ハ義を重んじて屢辯論に及べる支るゞ次の編に委〻記まゞ

官許明治八乙亥年十一月三日出版

明治太平記五編巻之二終

第六大區八小區
本所外手町十八番地
著者　村井静馬

第壹大區六小區
日本橋通二丁目四番地
東京書肆　版主　小林鉄次郎藏